

# いしづち

2026.5

MAY

No.170



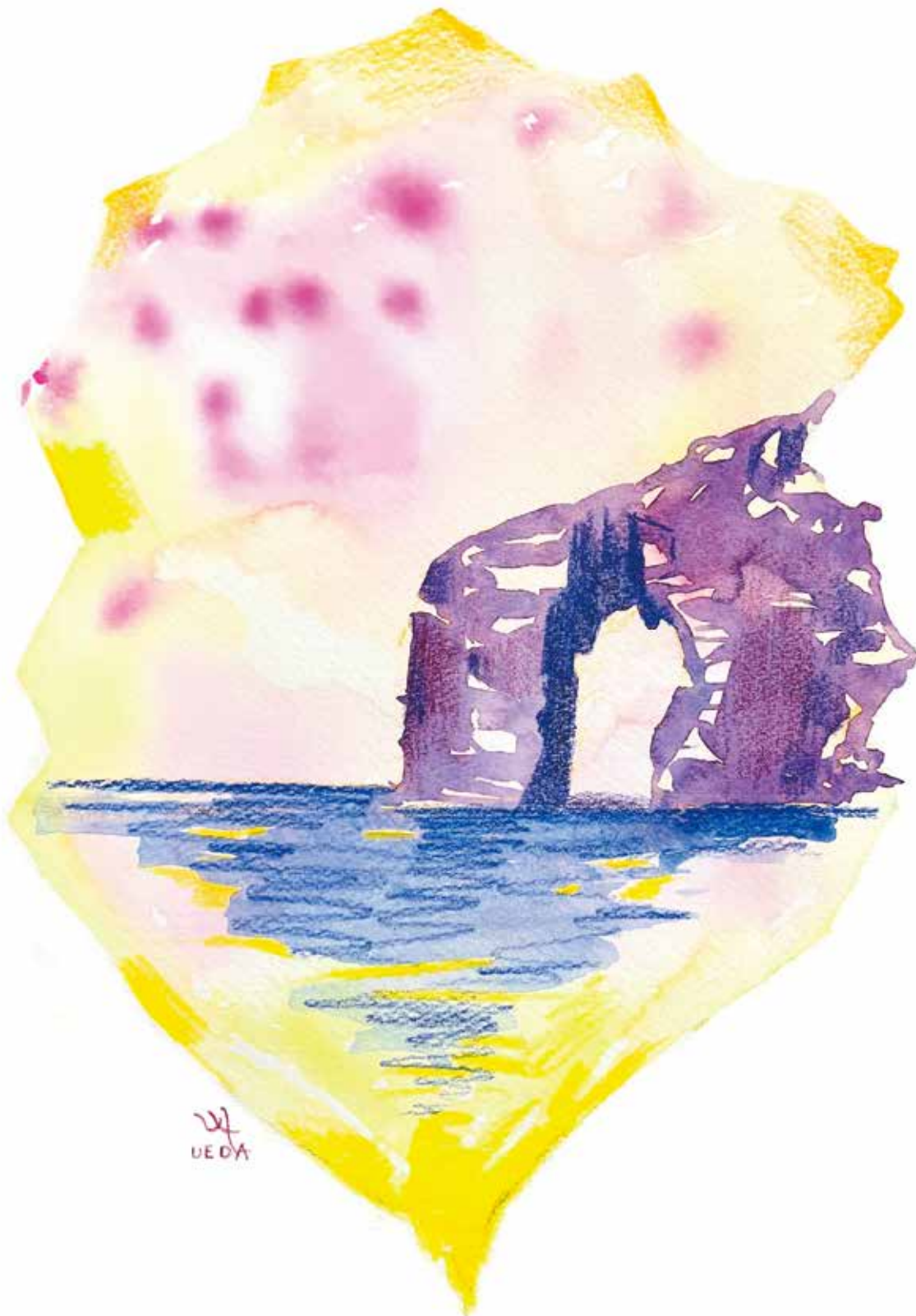
公益社団法人 愛媛県建築士会

Ehime Society of Architects & Building Engineers

<http://www.ehime-shikai.com>

生きた建築

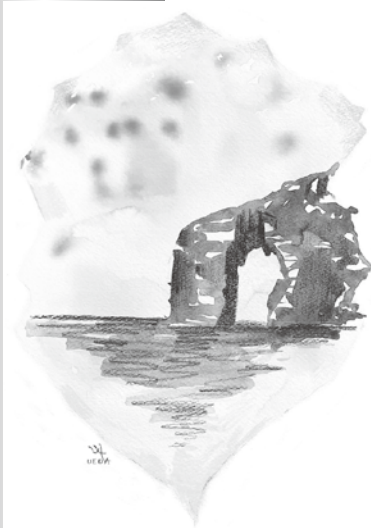
自分磨きへの道しるべ  
センスについての考察  
道後温泉の「ハレ」と「ケ」の成り立ち



UEDA

1	生きた建築	道上壯/V u A……①
2	自分磨きへの道しるべ センスについての考察	松山支部 尾崎 光高……③
3	道後温泉の「ハレ」と「ケ」の成り立ち	愛媛大学客員研究員 一級建築士 野本 健……⑤ 文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹……⑤
4	委員会報告	観音寺市出作町北自治会管理の観音堂・薬師堂について 愛媛県ヘリテージマネージャー 合田 純……⑦ 第34回全国まちづくり会議 in みやぎ 文化財・まちづくり委員会 委員 眞田井良子……⑫ 建築市民文化講座 2026 in いまばり 文化財・まちづくり委員会 白石 耕平……⑮ とびだせ建築士 in 東予「橋をつくろう」 青年委員会 委員 高木 伸幸……⑰ 愛媛県建築士会・愛媛木材青年協議会合同セミナー 青年委員会 委員 河田 大樹……⑰ 技術講演会 防災まちづくりから新しい展開へ 一級建築士会・建築士とともに築く新しい未来一 青年委員会 委員長 武智 良太……⑲ 令和7年度 全国青年委員長会議 報告 青年委員会 委員長 武智 良太……⑲
5	支部報告	松山支部6地区対抗ボウリング大会報告 個人の部 優勝 西地区 井上 竜治……⑳ 団体の部 優勝 北地区 入船 安紀……㉑
6	お知らせ	写真集「愛する愛媛の近代名建築」 (一社)愛媛県建築士事務所協会……㉒

※尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。



### 透明水彩・色鉛筆・紙

題：「海蝕洞（日振島）」

紙サイズ/F4

日振島は、愛媛県宇和島市の宇和島港から西方約28km、愛媛県と大分県との間の宇和海にある有人島である。昔から船の往来があり、島民が松明の火を振ることで灯台の代わりをしたことに因む、との説がある。936年この頃から藤原純友が活動を始める。1587年1月一 九州の豊後国で行われた戸次川の戦いで敗退した土佐国主長曾我部元親一行が潜伏。江戸時代には宇和島藩の領地となり、庄屋は清家氏が代々務めた。

表紙作者 上田 勇一 プロフィール

1974 東京生まれ  
1980 小学校から高校まで松山在住  
1990 東日本建築教育研究会製図コンクールにて奨励賞  
1991 愛媛県内高校生建築競技設計にて会長賞  
(愛媛県建築士事務所協会主催)  
1993 画家・高橋勉氏に師事。約10年間、古典絵画技法全般を学ぶ  
1996 日本工業大学建築学科 卒業  
1998 画家として活動開始する。東京や埼玉にて毎年個展開催  
2002 日本ファンタジーノベル賞受賞作者「世界の果の庭」  
(新潮社)の装丁担当  
2003 美術家の登竜門である昭和会にて優秀賞(東京/日動画廊)  
2010 愛媛県美術館に作品「ドライフラワー」収蔵される  
2015~17 愛媛新聞 冊子アクリート表紙画連載  
絵画教室やオリジナルブランド額工房「糊りチエルカ」を設立  
2017 「えひめの塗り絵」を出版  
その他、出版装丁画や受賞多数、全国にて個展中心に活動。  
現在、現代日本美術会 会員/審査員

僕が建築に興味を持ち始めた頃、パラパラとだが建築の書籍に目を通すようになった。その時、建築には当初の機能や用途のまま使われ続けているものと、当初の機能や用途から切り離されて使われているものがあることに気がついた。そう、建築の保存という考え方と相まって、僕は「生きた建築」というものを考えるようになっていった。

サヴォア邸は、1931～41年頃の間、個人の別荘として住宅として使われていた。第二次世界大戦中はドイツ軍が占拠、その後アメリカ軍が占拠、そして、戦後1945～60年頃までは放置され廃墟となっていた。1964年にフランスの文化大臣が民間建築モニュメントに指定して歴史遺産となり、2016年にコルビュジェの建築群として世界遺産となり、現在に至っている。

シュレーダー邸は1924年に建てられて、85年にシュレーダー夫人が亡くなるまで、住宅として使われていた。リートフェルトは自分のスタジオを1階に置き、64年に亡くなるまでは生活もしていた。その後、オランダの建築家によって修復が行われ、公設のミュージアムとなり、2000年に世界遺産となり、現在に至っている。

シルバーハットは、1984～92年頃まで住宅として使われていた。1986年に日本建築学会賞を受賞しながらも、92年頃以降は引越しにより空き家となり、2011年に今治市伊東豊雄建築ミュージアムの一角に再現移築され、現在に至っている。



住吉の長屋は、1976年に建てられて、79年に日本建築学会賞を受賞。2011年に安藤から施主へ「そろそろ中庭に屋根でもかけたら」と提案されるも「もうここまで来たら住み続けます」と一蹴され、当初の住宅のまま使われて、現在に至っている。

ユニテ・ダビタシオン・マルセイユは、1952年に建てられて、最大1600人が生活できる集合住宅+店舗、郵便局、保育園、体育館、プール、空室を利用したホテルとして使われ続け、2016年にコルビュジェの建築群として世界遺産となり、現在に至っている。

あなたは、どの建築が「生きている」と感じるだろうか？あくまでも僕の個人的な主観なのだが、建築として生み出された当初の機能や用途そのまま使われている建築こそが「生きている」と感じられて仕方がない。世界遺産という称号を授かりながらも、日本建築学会賞という栄誉を賜わりながらも、生まれ出づるレーゾンデートル（存在意義）から切り離された建築に、何か違和感と共に居心地の悪さを感じてしまう。

エンバーミング（腐敗処理）された英雄や、AIで再現された偉人を、どう評価すれば良いのか？とても難しい問題だと感じている。それと同じぐらい、遺産やデータとしてだけ延命させられている建築に対して、僕たちはもう一度、建築本来の意義を問い直す必要があるのではないかと考えている。





建築の機能や用途は、ある意味非常に残酷な側面を帯びている。1400年前の神社は、今でも神社として使われている。広島の大分神社は、島そのものを神として捉え、弥山<sup>みせん</sup>を信仰の対象として崇めるために建立された。何度も自然災害に遭いながらも、修復を繰り返して、現在に至っている。自然を考え、修復を前提に建てられた社殿は、当初と変わらぬ神社の機能を、今も維持しているのだ。

1400年前の住宅に、僕たちは、今もオリジナルのままに暮らすことが出来るだろうか？100年ほど前の住宅でも、既に、現代生活を送る器としての機能は難しくなっている。建築に携わる僕たちは、建築のレゾンドートルを客観的に真剣に、見極める時期に来ていると思っている。

日々命懸けで獲物を探し続ける動物と、動物園で食料の心配が無いながらも、閉ざされた檻の中で暮らす動物の、どちらが幸せだろうか？どちらも幸せて、どちらも不幸せだろう。建築は生き物ではないが、人のために考え出され、生み出された建築の価値や意義を、僕たちはもう一度考え直す必要がある。僕たちは、建築を「モノ」としてしか考えておらず、そこに盲目的な「保存」が棲みついているのではないかと、僕は捉えている。

サヴォア邸も、シュレーダー邸も、シルバーハットも、今も現役で人が住んで、現代生活を営んで欲しいと思っている。歴史上の偉大な建築としての標本ではなく、今を生きる人々の生活の器として、人生のゆりかごとして機能して欲しい。そうあるのが建築本来の姿であり、また、建築のレゾンドートルでもあるからだ。

僕は決して、建築を保存することを否定しているわけではない。もっと何か良い方法で、その建築本来の使われ方を続けられないものかと思っているだけだ。残念ながら、62年もの古びた僕のこの頭では名案は浮かんでこない。是非、若くて新しいみなさんたちの知恵で、価値ある建築がずっと現役で活躍し続けられる方法を見つけ出して欲しいのだ。

僕の八幡浜の実家は、もう既がない。大正時代に建てられた木造の住宅だった。水道や電気は後付けで、窓は障子の外に雨戸を閉める構造だった。家の中は、電気の配線が柱や天井に直付けされ、水道が外壁を貫通して入ってきていた。押入れの中の壁は土壁で、布団がいつもザラザラだった。家前の道路の拡幅工事で、2007年に取り壊されて消えていった。

時代に取り残されて役目を終えた建築は、消えゆくものだ。逆に、時代を超えて輝き続ける建築は、その当初の輝きが曇ることなく輝いていて欲しい。残酷な建築の難問を、僕たちはもう一度、解き直す必要があるのだ。





松山支部 尾崎 光高

# センスについての考察

高校生の頃、授業中に担任の先生からセンスがないといけない、センスを磨きなさいと言われて続けていました。南予の山奥から出て来た私は当初扇子と勘違いしていました。扇子でどうするのかしばらく悩みましたが、その後、絵画的・音楽的センス等なんだと理解した次第です。

一言でセンスと言っても何ものであるか分かりづらい為意味を調べてみました。センスとは、一般的に「物事を感じ取って良し悪しや美しさ、適切さを判断する感覚や能力」との事ようです。そして「**センスの良い人の特徴**」として

1. **バランス感覚がある。**色・形・配置・言葉などの調和（バランス）を自然にとれる。
2. **シンプルにまとめられる。**余計なものを足しすぎず、必要なものだけを選ぶ力がある。「引き算」が上手いのが特徴。
3. **観察力がある。**人や物事をよく見ていて、細かな違い、雰囲気・流れを感じ取れる。
4. **柔軟な発想ができる。**固定観念にとらわれず、新しい組み合わせや見方を思い付く。
5. **経験や知識が豊か。**多くのものを見たり聞いたりしている為、良い例、悪い例の蓄積がある。
6. **場に合う選択ができる。**状況、相手、目的に合ったちょうど良い判断ができる（場のセンス）。

まとめとして、「**センスが良い人＝観察力＋経験＋バランス感覚**」であり、「**センスは才能だけでなく、見る量で育つ。**」これらを見てみると、センスは大方生まれつきでなく様々な経験等によって生まれてくるものようですね。

芸術的センスだけではなく、スポーツ等あらゆる分野でそれぞれのセンスがあるように思いますが、今回は建築関連に絞って考えてみたいと思います。

## 建築業に求められるセンスとは

建築業の場合様々な分野として、営業職・設計職・現場技術者・専門技能職などがあり、芸術的・美的センスだけでなく多岐にわたります。

1. **営業職に求められる営業的センス**として、主に説得力・顧客対応力・施主の要望に対する提案力・融資関係提案力・予算調整力・ある程度の技術的知識等から生まれてくることが考えられます。如何に的確に施主の要望をくみ取って契約に結び付けるかが大事ですね。仕事を取ってくるのが仕事ですので、どの的に絞って対応するか、様々な選択肢の中で最良の条件などを提示でき

るか、又、施主の性格、住宅部門等では家族関係などを把握して信頼関係を築けるか、寄り添えるかで結果が変わってくるかと思えます。最初からバリバリの営業ではない為、一人前になるには何年も掛けて豊富な知識を取得、経験等を積み重ねていく必要があります。如何に効率よく成績を上げるか等、試行錯誤していくことで営業的センスが磨かれていくように思えます。契約率UPが最大の目的でもあり、どのようにして顧客満足度も上げていくか知恵を絞ることを惜しまない努力を心掛けることが大事かと感じております。そして、営業であっても美的センス・接客に於いて雑学等も必要であると思えます。

2. **設計職に求められるセンス**としては、施主の要望を的確に捉えた使い勝手の良い間取、夢溢れる空間デザイン、カッコ良い個性的な外観デザイン、魅力的な色使い、省エネ性、安全性、総合予算の組み立て・調整、世界中の建築様式の把握・研究等などから生まれてくると思いますが、設計の場合は、大きく意匠設計と構造設計に分かれますので異なってきます。「意匠設計」の場合は、プラン、内外デザイン、予算に応じた提案（予算が合わなければ契約不可）、訴求力、差別化等あります。プランセンスは件数をこなすことが大事ですが、一番大事なことは他にない提案をしていく努力をすること（競争に勝たない）。デザインセンスは有名な建築家だけでなく街中の優れた建築を観察する、美術館などで名画を鑑賞する・音楽を聴いて感受性を強くしていく、工業デザイン・ファッション（主に色彩）などにも目を向けるなどにより、色彩感覚、五感を磨いていき美的センスを身に付ける。より良い建築を目指すには欠かせません。（松村正恒先生は能楽を嗜まれておられたようです。精神性を磨く努力も必要かと思えます。）訴求力センスは、技術面だけでなく例えばTVのコマーシャルで何の製品をどのような手法で紹介しているか等分析する癖を付けるのも一つの方法かと思えます。住宅の場合は、耐震性など技術的なアピールとか家族団らんをテーマにした内容とか様々ですね。何十秒かの間に何を訴求しているか探究するのも良いかと思えます。自分は何を提供したいのか常に考えるようにしていかないと何も得られないように思えます。「構造設計」の場合は、設計士がデザインした複雑な建築物をどのように構造的に成立させるか、コストを抑える方法はどうすれば良いか、合理的な強い構造体とするか等ですが、そういうことが構造的センスかと思えます。世界的建築家の丹下健三先生には、坪井善勝さんという優れた構造設計者がおられたので優れた作品が世に出せた



作画 道後温泉本館 ▶

わけです。最近により複雑な建築物が出てきていますので益々重要なポジションかと考えます。又、構造設計も感性・(構造的) 発想力が必要なように思います。

**3. 現場技術者・専門技能職に求められるセンス**  
としては、まず現場技術者(現場施工・管理)の場合、工程計画・管理、施工図・実行予算作成等を円滑に行う為の創意工夫をこらしていく上で如何に効率良くまとめていくか、工期短縮するにはどうすれば良いか等が施工的センスになるかと思えます。職人との良好な人間関係を築くのに長けた人、地下工事に長けた人等、様々な部門に於いて専門的知識を研究して力量を発揮出来ることも現場のセンスと言えるかもしれません。作業効率が上がり、工期短縮が実現出来た場合は純利益が増えるわけですね。現場監督等に於いては経営的センスも必要かもしれませんね。専門技能職については、下請業者、職人の方となりますが、こちらを受け持つ工事の工程管理、工期短縮、優れた技術による優れた仕事を実践する為にどのように創意工夫していくかによって技術的センスが養われると思えます。同じように利益が残せるように如何に効率良く仕事をこなしていくかも大事ですよ。

建築業は新築部門、リフォーム部門、インテリア部門、エクステリア部門等がありそれぞれ内容が異なってきますが、それぞれのセンスについては共通しているのではないのでしょうか。設計業を始めて45年(独立して30年)となります。独立前には、プチ営業とかプチ現場監督をしていた時期もあり、それぞれの大変さは理解しているつもりではありますが、異論もあるかと思えます。しかしながら参考にさせていただければ幸いです。

### センスを磨く為に行ってきた方法

最後にまとめとして、私がセンスを磨く為に行ってきた方法をご紹介します。

**①優れた人の考え方・技術等を観察し取り入れていく。** 絵については教員時代、美術の先生の技法を観察し真似る事から始めました。パースは独学の為、パース集の本を買ってプロの技法を研究し、設計については建築雑誌等にて間取・デザインの研究をしました。

**②人と同じことをしない、又はありきたりのアイデア**

では通用しない、常に良いものを追求していく。

**③美術鑑賞、音楽鑑賞、楽器演奏等を通して感受性、五感を磨く、70才の今は保つ努力をしています。**

**④色んな機会に優れた建築物を観察するようにする。**

**⑤実例を見て自分だったらこうするというを常に考えるようにする。**色んな引き出しが増えてくると実務に役立つ。

**⑥何事も素直な気持ちで受け入れて、まず真似てみる。**但し自分に合わない場合は削除する。

**⑦なるべく固定観念は捨てる、捨てないと新しいものが入ってこない。**

**⑧様々な建築様式の勉強を怠らない。**情報化の社会では施主の要望が多岐にわたる為、対応出来る力を蓄える。

**⑨何があっても逃げない、やりきる姿勢が未来に繋がる。**若い頃は嫌だ、逃げたいという思いが多々ありましたが、今のままでは駄目だと方向転換しました。苦しんだことは無駄にならない、後々役に立ち楽に仕事が出来てくるようになります。等です。何だかんだ言っても、やはり仕事を楽しむことが一番かと思えます。

最後にセンスを早く磨くことが出来るのは「**観察力+良い経験+素直さ+試す回数**」などを実践していくことのように思えます。皆さん、それぞれの分野で良い仕事をしてみてください。

以前描いた道後温泉本館ですが、色鉛筆にて着色してみました。色が入ると様々な情報が入ってきます、モノクロより建物の雰囲気等を伝え易くなります。色彩感覚が今一という方は、まず絵画等鑑賞する、スケッチ等に色を付けてみる、どの色を組み合わせれば何色になるかを試してみる等、実践していく過程で美的センスが生まれてきます。プランについても、優れた案を見て、使い勝手動線、考え方、アイデア等を参考にしていく過程で設計に関するセンスが生まれて来ます。何もしないと前には進めません。少しずつ、日々の努力が実を結んでいきます。より良い建築作品を提供していきましょう。

今回は、窓、外壁等部分的な表現法についてご紹介して参ります。尚、建築士会HPより、カラー版が閲覧出来ますので宜しくお願い致します。

# 道後温泉の「ハレ」と「ケ」の成り立ち

執筆：愛媛大学客員研究員 一級建築士 野本 健

監修：文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹



道後温泉 椿の湯

### ■ はじまり

県外から友人が訪れた際、私たちはまず道後温泉本館（以下、本館とする）へと案内します。一方で、地元の人々が日々の疲れを癒やすのは椿の湯ではないでしょうか。

現在、松山市民の間では、本館は観光客を迎える「ハレ（非日常）」の場、椿の湯は日常的に利用する「ケ（日常）」の場という認識が定着しています。しかし、この明確な使い分けは、本館が完成した明治27年（1894）当初から意図されていたものではありません。実は、その後の大正期に起こった「ある計画」と「住民の葛藤」によって形作られたことが、近年の調査・研究で明らかになりました。

## 鉄道延伸がもたらした「道後温泉増築計画」

大正7年（1918）、道後温泉の将来を左右する大きな増築計画が発表されます。背景にあったのは、国鉄讃岐線の延伸です。松山駅まで鉄道がつながることで観光客が急増することを見据え、受け入れ態勢を強化する必要がありました。

当時の本館は、以下の3つの浴場を備えた市民の日常の場でもありました。

- ・養生湯：一般庶民のための浴場
  - ・神の湯：夏目漱石が入浴したことで知られる浴場
  - ・霊の湯：伊藤博文も入浴した格式高い浴場
- 一方、現在の椿の湯がある場所には、お遍路さんのた



昭和初期の道後温泉の街並み（提供：三神 将）

めの松湯、皮膚病患者のための薬湯、そして牛馬湯といった浴場が並んでいました。この時点では、地元の人々にとって本館はまだ日常使いの場所だったのです。

## 四期にわたる壮大な構想と、直面した湯量問題

当初の計画は、以下の四段階で進められる予定でした。

### 道後温泉増築計画

第一期工事	西湯・砂湯の建設（中等湯・普通湯）
第二期工事	養生湯棟改築（中等湯）
第三期工事	鷲の湯の建設（高等湯・家族湯）
第四期工事	道後公会堂の建設（浴場併設）

まず第一期工事として、本館の養生湯を改築する間の代替施設が必要となりました。そのため、現在の椿の湯の敷地に西湯と砂湯が計画され、大正11年（1922）に



西湯（提供：三神 将）

無事完成を迎えました。

しかし、計画が第二期へと進もうとした際、道後の街を揺るがす大きな問題が浮上します。それがポンプアッ

## 道後温泉の「ハレ」と「ケ」の成り立ち



砂湯 (提供: 三神 将)

プによる増湯計画です。

もともと道後温泉は、決して湯量が豊富とはいえない地域でした。明治27年(1894)の本館改築時、初代町長の伊佐庭如矢が、城大工の子孫である坂本又八郎を棟梁に据えたのも、「別府のような湯量で勝負できない分、圧倒的な建築美で客を呼ぶ」という戦略があったからです。「強引な汲み上げは、生活の生命線である温泉を枯渇させるのではないか」——。そんな不安を抱く地元住民の間では、増湯を巡る賛成派と反対派の対立が激化しました。1年半にも及ぶ論争の末、最終的に「増湯は

中止する」という決断が下されました。これにより、第二期以降の計画は大幅な修正を余儀なくされることになります。第二期工事の養生湯棟(現南棟)の改築工事はポンプアップを行わず、改築されました。

第三期工事の鷺の湯建設では当初、観光客をターゲットにした豪華な「高等湯・家族湯」を目指していましたが、湯量不足や用地買収の難航により、地元住民が日常的に利用する公衆浴場へと性格を変えて建設されました。



鷺の湯 (提供: 三神 将)



大正期の玄関棟と養生湯棟 (提供: 三神 将)



道後公会堂 (提供: 三神 将)

### まとめ

これらの変遷を整理すると、現在私たちが目している「本館=観光拠点(ハレ)」と「椿の湯など=生活浴場(ケ)」という明確な使い分けのルーツが見えてきます。この役割分担は、大正期の計画における「観光地としての理想」が、住民の意志や資源の制約という「現実」と衝突し、折り合いをつけた結果として形成されたものなのでした。

道後温泉の都市構造は、最初から完璧なマスタープランがあったわけではありません。鉄道延伸という近代化の波と、源泉を守り抜こうとした地域コミュニティのせめぎ合いの中で、必然的に導き出された形でした。

本研究を通じて、地方温泉都市が近代化する過程での

生々しいリアリティの一側面を提示できたと考えております。今後は、これらの建築に関与した設計者や施工者の詳細をさらに解明し、道後の空間形成プロセスをより深く追及していこうと考え、筆を擱かせていただきます。

今回の研究内容は日本建築学会四国支部研究報告集第26号にて『大正期における道後温泉本館・周辺温泉施設の変遷：道後温泉の建築史研究(1)』として発表しています。また、道後温泉本館の保存修理工事やその歴史については、『道後温泉本館保存修理工事 総集編』や『道後温泉湯釜ものがたり』に詳述していますので、ご興味のある方はぜひ一読いただければ幸いです。

\*本書掲載の文章・図版の無断複製・転載を禁じます。

# 観音寺市出作町北自治会管理の 観音堂・薬師堂について

愛媛県ヘリテージマネージャー 合田 純

## はじめに

観音寺市にある観音堂・薬師堂は、香川県との県境近くに住む私が家族連れでうどんドライブをしていたところ偶然発見した建物であった。文化財未指定物件としてはほとんど残っていない近世初期の形ではないかと思い、敷地内の掃除のために居合わせた自治会の方に2堂の謂れを伺ったのがはじまりである。



▲道路から見えるお堂

## 建造物の概要、調査の動機

香川県の西端に位置する観音寺市の市街地から東へ2キロほどの出作町に薬医門を構え、堀に囲われ、どことなく廃寺のような独特の雰囲気醸している土地がある。現在は出作北自治会館となっているその敷地の中心に、ひと際目を引く2宇の小堂が並んで建っている。向かって左が観音堂、右が薬師堂。どちらも三間四面の寄棟流れ向拝付き本瓦葺である。自治会の方が過去の勉強会等の資料を見せてくださり、観音堂は元禄4年(1691)、薬師堂は元禄15年(1702)にどちらも改築されているようである。歴史の変遷の中、明治維新時の廃仏毀釈の荒波に耐え、現在は出作北自治会所有のお堂として自治会の方々が管理してきた。しかし、今後発生が懸念されている南海トラフ巨大地震によって壊れる前に2堂を解体し、簡素な1建物を建て御仏をまとめてお祀りしようとして建設委員会を立ち上げその活動を開始されている。先述した自治会の方は建設委員会の会長で、かつて文化財として保存すべく活動した時期もあったが、道が閉ざされ諦めた旨を語っておられた。古建築に専門的に携わる我々としては、この状況を多くの建築人に知っていただき、中世建築の流れを汲む本物の社寺建築である当該2堂をなんとか保存する道はないかと、調査を決意した次第である。



▲観音堂 元禄4年(1691)



▲薬師堂 元禄15年(1702)



▲それぞれの瓦当に年代が印されている

## 時代背景

元禄年間といえば、徳川5代綱吉公の治世で徳川幕府の安定期である。朱子学が奨励され、武断政治から文治政治へと転換が進み、『生類憐みの令』が発出された。そして面白いのが、市中を騒がせ、未だに歌舞伎やドラマの題材『忠臣蔵』として有名な赤穂浪士討ち入り事件が起きたのも元禄15年、折しも薬師堂改築と同じ年である。情勢不安な印象もある一方、上方の町衆を中心に元禄文化が花開き、新たな文芸や工芸などが生まれた。この頃当地は丸亀藩京極家の領地である。

この時代の大名といえば、その軍事費をそぎたい幕府の政策により、社寺への多額の寄進が奨励された。それ

までの社寺の修復費用は社寺自らが勧進を起こし、身分の貴賤を問わず寄進を募っていた。京極家は外様大名であり、御三家に連なる高松藩松平家と比較すると社寺への寄進は圧倒的に少なかったようだ。

諸国との繋がりについては、金毘羅参詣客が多く訪れ、瀬戸内海を挟んだ近畿一円、全国とのかかわりが当時既にあつたようだ。また石材産出の歴史とのかかわりも着眼するべきかもしれないが、文献調査があまりに広範囲になってしまい収集がつかないので割愛したい。

### 出作町の歴史・観音堂、薬師堂建立の沿革

昭和の市町村合併で観音寺市になる前は、当地は豊田郡常磐村に属していた。観音寺市旧市街地から離れており、もともとは農村であつたようである。中世から近世へと続く新田開墾に伴い人口が増加したようだが、はっきりしたことはわからない。ただし『奥ノ坊海岸寺』『妙円寺』などの寺名が言い伝えられており、600年ほど前にはそれらがあつたようだ。地域の方々が『奥ノ坊』と言い慣わしている場合は現在井戸があり、上水道整備前までは貴重な生活用水として共同で使っていたそうである。延宝8（1680）年に『出作岡原開墾』が完成し、ようやく農村集落としての基盤が整った。その12年後、元禄4（1691）年に観音堂、続いて元禄15（1702）年に薬師堂が再建されている。尼寺として地域の人々に親しまれ、江戸時代から毎年祭りがおこなわれている。



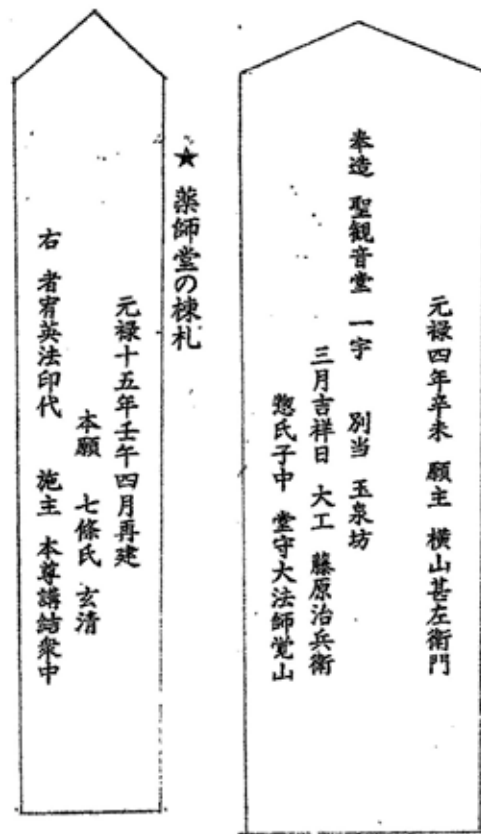
▲奥の坊に残る井戸。現在も滾々と水が湧き出ている

Wikipediaの情報によれば、『大日本篤農家名鑑』に、常磐村の横山岩吉、馬淵勘四郎、福田政吉、安藤廉之助、以上4名の記載があるそうである。

### 仕様、寸法調査、棟札調査

建設委員会の香川会長に了承を得て、去る令和7年12

月13日、愛媛県ヘリテージマネージャーの峰岡、白石、合田の3名で調査を行った。観音堂・薬師堂はよく似た建物で、調査途中で混同してしまわないよう留意した。それぞれの建築的特徴はあとで述べたい。棟札についても小屋裏を調査したが、見つけることができなかった。地域の方にいただいた資料に棟札の記録が載っていたので、以降それを参考にした。



▲資料で見る棟札

### 文献調査「讃岐社寺の棟札 黒川隆弘著」

観音堂の棟札の記録に『願主 横山甚左衛門』『大工 藤原治兵衛』とある。香川県立図書館にある『讃岐社寺の棟札』という文献から観音寺市と三豊郡に限定し棟札の状況を調べた。すると『荘屋 横山甚左衛門』の名を元禄7年の観音寺三宝荒神宮、同11年の観音寺若宮幣殿、『甚左衛門』の名を寛文13年の観音寺若宮社、『荘屋 横山小七郎』の名を正徳6年の観音寺若宮八幡宮に見つけることができた。いずれも願主であり、先述したWikipedia情報の篤農家ともつながってくる。

一方、薬師堂の願主『七条氏玄清』の名はどこからも見つけることはできなかった。また、大工名『藤原治兵衛』も他の棟札から見つけ出すことはできなかった。ただし横山甚左衛門の寄進で建てられた観音寺三宝荒神宮

の大工が『荻田次兵衛尉藤原頼次』となっており、藤原治兵衛との関連が興味深い。当時の大工や武家は、氏、姓、苗字、字名、諱を併記しており、親族であった可能性や、同じグループ（現代の工務店）の大工であった可能性も考えられる。

### 文献調査「讃岐近世社寺建築造営に関与した堂宮大工 黒川隆弘著」

棟札のみを調べてもその関連性は想像するしかないが、体系的に整理された資料を見つけることができた。それによれば、この時代に琴弾八幡宮、観音寺のお抱え大工であったのは大塚家と荻田家である。両家は観音寺市内の大工集住地である『大工分』に居住していた。特に荻田家は、観音寺、坂出市の春日神社などを中心に、東讃地方一円に作品を残している。江戸中期から幕末にかけて塩飽大工が台頭していたことから、苛烈な縄張り争いに揉まれていたことが想像できる。

### 文献調査「観音寺市誌」

多くの市町村で編纂されている歴史資料には、我々が求めるような建築的な決定的史実は載っていないことが多い。しかし面白い記述を見つけることができた。観音寺市には元禄時代、瓦屋が密集している地域があり『瓦屋の森』と呼ばれ、丸亀藩の御用を務めていたという。

### 建築的特徴



▲ 振れ隅にして屋根を美しく見せる

形の良く似た2堂を混同してしまわないように表組にまとめた。ここでは特に中世の名残を残している点について述べたい。社寺建築の黄金期は中世（鎌倉、室町期）である。中世の建物がなぜ素晴らしいかをここで述べることはできないが、大きく括ると、「全体のプロポーション

が人の目にどう映るか」に最大限の注意を払っていることである。マニュアル的な書物が出回ってなく、一子相伝の技術継承がなされていたため美しいものはどこまでも美しい。それが近世に入ると、マニュアル本が出回り、請負制度が確立し、材木は規格化され、全体の効率は大幅に上がった反面、プロポーションが人の目にどう映るかという根本的な美意識を忘れ、細部装飾一辺倒の華美に走るようになる。以上のことを踏まえて、観音堂と薬師堂がなぜ素晴らしいのか述べてみたい。

共通する点として、野隅木を大胆に振って妻の勾配を急にし、棟を作っている。それによって雄大な印象を受ける。野隅木を振ると、下にある化粧隅木との通りが合わなくなるため小屋組みがややこしくなる。しかし手間を惜しまずやっている。近世に入るとこういった技術は一気に失われ、近畿の古典的な棟梁でもない限り誰もやらなくなる。中世建築の技術が再び脚光を浴びるのは明治以降に研究が進んでからである。

各部の彫刻も当時をよく表している。観音堂の象鼻は、姿の良い近世初期の形であり、それより11年後に建てられた薬師堂の獅子鼻は、前足のある獅子で巻毛の彫り方はまだ地味である。この後、各工匠は木鼻に凝り始めますますリアルな形となる。臺股も同様で、観音堂、薬師堂ともに肩の曲線は室町の雰囲気だが、脚先の高さが高くなっている点が近世初期的でおもしろい。この後臺股も輪郭がなくなり、龍や獅子、中国故事などの丸彫りとなっていく。一部の軒巴瓦の瓦当にそれぞれ元禄の年号がデザインされている。当初のものを見て間違いのないだろう。

### 須弥壇、厨子

観音堂の厨子は折衷様垂麻組の組物を持ち、漆塗り。



▲ 観音堂厨子組物

薬師堂の厨子は唐様詰め組、漆塗りになっている。以下表組にまとめた。



▲薬師堂厨子組物

建築的価値について



▲仲良く並ぶお堂

いち大工である私が論じることではないかもしれないが、幕末明治期の社寺建築がその特異性や立地の優位性、知名度を理由に国や県の文化財指定を受けているにも拘らず、



▲調査を終えて建設委員の方々と

ず、中世の名残を残す本物の社寺建築である当該2堂が、市町村どころか何の指定も受けずに取り壊されようとしている。この2堂の価値が高いことは既に述べた。地域の方々の意向には耳を傾けなければならないが、可能な限り保存修理、活用の必要性を訴えたい。

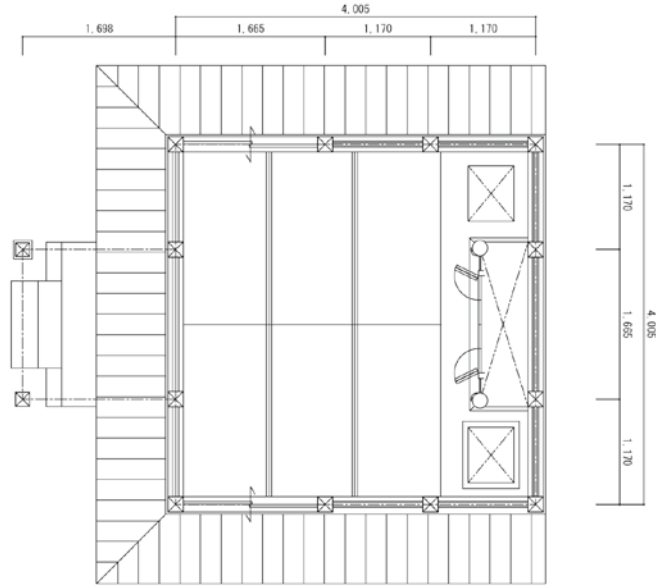
(合田純)

協力：建設委員会 香川さん・西川さん

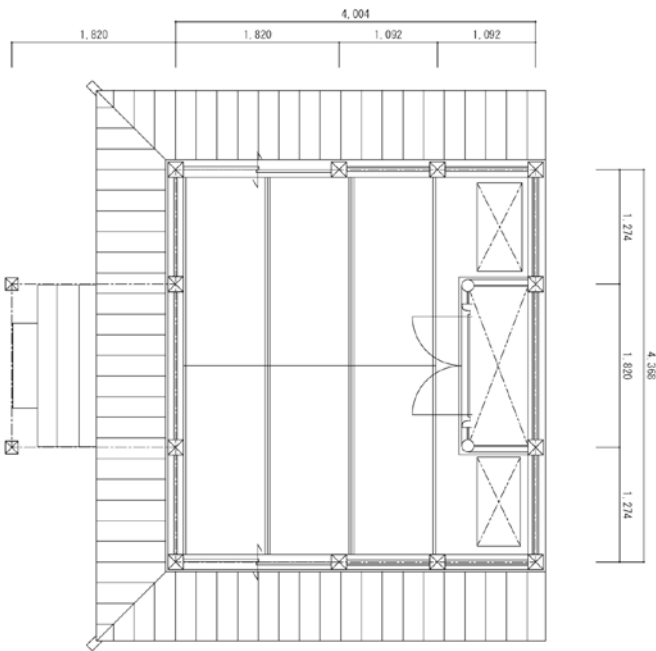
調査 (R7.12.13)：愛媛県建築士会ヘリテージマネージャー 合田純・白石耕平・峰岡秀和

寺院名	七寶山 薬王寺	
所在地	香川県観音寺市出作873	
	観音堂	薬師堂
	西側	東側
建築年代 (和歴)	元禄4年	元禄15年
西暦	1691	1702
平面	三間四面	三間四面
屋根	寄棟本瓦葺き	寄棟本瓦葺き
	流向拝付	流向拝付
身舎柱・組物	角柱面取	角柱面取
	舟肘木	出三斗 (六枝掛)
種	石場建て	石場建て
	一軒	一軒
建具	半繁柱	本繁柱
	芯打ち	手挟打ち
正面部戸・左右引き違い板戸	正面部戸・左右引き違い板戸	正面部戸・左右引き違い板戸
周囲胴板張り・3方濡れ縁付き	周囲胴板張り・3方濡れ縁付き	周囲胴板張り・3方濡れ縁付き
向拝の形状	・連三斗・実肘木付	・連三斗・実肘木付
	・象鼻 (古式) 捨斗なし (失った?)	・獅子鼻捨斗あり
瓦	・水引虹梁・袖切・浅い唐草	・水引虹梁・袖切・浅い唐草
	袖切り・捨眉	袖切り・捨眉
内部天井	・本臺股 (彫刻あり・透かしなし)	・本臺股 (彫刻あり・透かしなし)
	連三斗は枝割無視	六枝掛け
厨子	身舎柱との繋ぎなし	身舎柱との繋ぎなし
	向拝柱下に木製の礎盤	向拝柱下に木製の礎盤
木鼻	一部軒巴の瓦当に	一部軒巴の瓦当に
	「元禄二二 (四) 末」	元禄十五 (午)
台輪	棟・隅棟・隅鬼は後補材か	棟・隅棟・隅鬼は後補材か
	軒唐草に宝珠の模様あり	軒唐草に宝珠の模様あり?
組物	棟に鳥襖・隅蓋は宝珠	棟に鳥襖・隅蓋は宝珠
	丸柱・粽・棧唐戸 (折れ戸)	丸柱・粽・棧唐戸 (折れ戸)
長押	蛭眉	蛭眉?
	唐様系の若葉・渦	唐様系の若葉・渦
彩色	あり 唐様	あり 唐様
	和様出組 亜麻組	唐様三手先詰組
脇侍	拳鼻付	尾極なし
	桙肘木・実肘木・桙肘木	桙肘木・実肘木・通肘木・桙肘木
本尊	笹縁なし	笹縁あり
	鬼斗の形状が古風	鬼斗の形状が古風
協侍	支輪あり。わずかにS字形	支輪なし
	飾り金具あり	飾り金具なし
その他	あり 全体的に極彩色	あり 琵琶板 青・白?
	頭貫 波	棧唐戸 黒?
その他	台輪 地紋	頭貫 //
	琵琶板 雲	台輪 //
その他	支輪板 中央に白?	組物 // 木口白
	実肘木・頭貫・木鼻	天井桁 //
その他	渦彫刻部 朱	柱と長押の一部に金
	生観世音菩薩坐像	薬師如来坐像
その他	左 毘沙門天立像	左 月光菩薩立像
	右 不動明王像	右 日光菩薩立像
その他	弘法大師・鬼子母神	その他 十二神像

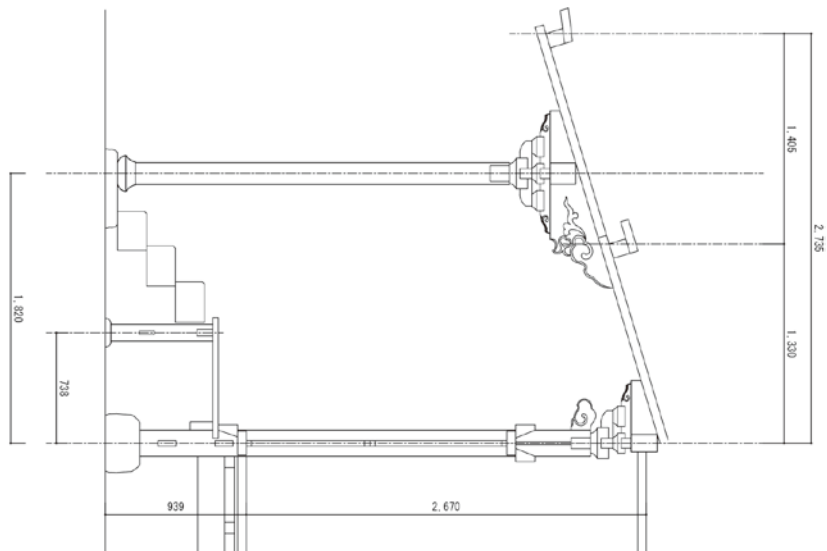
観音堂平面图



薬師堂平面图



薬師堂断面図



# 第34回全国まちづくり会議 inみやぎ

文化財・まちづくり委員会 委員 眞田井 良子

1月30日(金) 13:30~16:30

青葉山公園 仙臺緑彩館

31日(土) 7:30~15:30

女川町まちなか交流館~石巻市

参加：峰岡秀和・花岡直樹・眞田井良子



▲ 緑彩館にて

全国まちづくり会議へは、花岡、峰岡、眞田井の3名で参加して来ました。私自身、約30年前に仙台で学生時代を過ごしていたこともあり、震災後何も出来なかったという思いから、復旧・復興の現状を見てとても胸が痛くなり、みなさまの努力の結果を目の当たりにして胸が熱くなる2日間でした。

少しでも沢山の方に共有させて頂ければと思います。

## 1. 女川町の復興まちづくり (木村 明 氏)

女川町産業振興課参事の木村氏は、壊滅的な被害を受けた町を「1つの器」として作り直しています。

- ・「逃げる」を基本とした高台移転と減災  
住民の命を守るため、山を切り開いた高台へ居住区を移転させました。最大の特徴は、海への眺望を遮る巨大な防潮堤を築かず、街の構造自体で津波を防御し、何かあれば「安全な場所へ逃げる」という減災の考え方を徹底しています。
- ・デザイン会議による迅速かつ豊かな景観整備  
復興のスピードと質の高い景観を両立させるため、建築家の坂茂氏などの専門家、町長、行政が即断即決できる「デザイン会議」を設置しました。これにより、駅前エリアの拠点化や、海まで見通せるシンボル空間が実現しました。
- ・「活動人口」の創出とよそ者の参画  
人口減少を見据え、住民か否かを問わず町に関わる「活動人口」の拡大に注力しました。行政、住民、そして「よそ者」と呼ばれる外部の支援者が連携し、新

しいことに挑戦し続けるプラットフォームとしてのまちづくりを推進しています。



▲ 女川交番被災状況

## 2. 宮城県の防災施策と今後の備え (横山 氏)

宮城県防災推進課長の横山氏は、県全体の被害状況と、将来の災害リスクに対する最新の目標について説明して下さいました。

- ・地域特性に応じた「多重防御」モデル  
リアス式海岸の北部では高台移転を、平野部の南部では防潮堤、嵩上げ道路、防災林などを組み合わせた「多重防御」を採用しました。単なる復旧ではなく、将来を見据えた「創造的復興(宮城モデル)」の構築を目指しました。
- ・最新の被害想定に基づく「減災目標」の設定  
東日本大震災クラスを想定した第5次被害想定調査を行い、ハード対策(防潮堤等)があっても甚大な被害が出る可能性を明確にしました。これに基づき、10年間で津波の死者数を8割減少させるという具体的な目標を掲げています。
- ・避難意識の向上とソフト対策の強化  
ハード対策の限界を認め「迅速な避難」が命を守る鍵であると強調しています。ウェブ上での津波避難シミュレーターの開発や、震災の教訓を次世代に伝える伝承活動を積極的に進めています。

## 3. 竹浦地区の住民主体による集落再生(鈴木氏)

女川町竹浦地区の元区長・鈴木氏は、小さな集落がどのように誇りを持って再建を果たしたかを教えてくださいました。

- ・コミュニティ維持のための「集約案」拒否  
行政から提示された周辺集落との合併案(集落の集約)を「祭りや歴史などの文化が異なる」として拒否しました。住み慣れた土地の近くで、顔馴染みのコミュ



▲竹浦地区の景観に配慮された家並み

ニティを維持するために独自の高台移転を選択しました。

#### ・住民独自の「景観ルール」の策定

「外はみんなのもの、内は自分たちのもの」という考えのもと、かつての美しいまち並みを再現するためのルールを作りました。白壁やスレート葺きの屋根など、統一感のある景観を目指し、何度もワークショップを重ねて合意を形成しました。

「景観ルール」を策定するにあたり主な苦労したポイントは以下の2つです。

### ①避難先の分散による集まりにくさ

震災後、住民は各地に分散して避難生活を送っていました。

#### ・30箇所以上への分散

かつては1箇所にとまって住んでいた住民が、震災後は30箇所以上の異なる場所に分散して生活することになりました。

#### ・ワークショップ開催の負担

景観ルールを決めるためのワークショップ(勉強会)へ足を運んでもらうこと自体が非常に大変な作業でした。

### ②個人の再建費用とルール化への抵抗

「自分の金で建てるのだから、好きにさせてほしい」という意見との調整に苦慮しました。

#### ・自力再建の権利意識

景観を整えること自体には当初から大きな反対はありませんでしたが、いざ具体化すると「自分のお金で家を建てるのに、なぜ何度も集まってルールに従わなければならないのか」という不満を持つ住民もいました。

#### ・既存の人間関係

すでに知り合いの大工や建材店に依頼することを決めている住民にとって、集落全体のルールに合わせることは心理的な壁となりました。

### ③集落の存続そのものを巡る葛藤

景観ルール以前に、行政から提示された「集落の集約案」への対立もありました。

#### ・歴史・文化の維持

行政は効率性の観点から他の集落との合併(集約)を提案しましたが、竹浦の住民は「祭り(獅子振り)や歴史、文化が異なる」としてこれを強く拒否しました。

#### ・独自の再建への決意

自分たちの誇りである集落を維持するために、あえて独自の高台移転と景観ルール作りを追求することになりました。

### ④具体的なイメージの共有

言葉だけではルールの意義が伝わりにくいため、視覚的なアプローチで理解を求めました。

#### ・模型による可視化

石巻工業高校の生徒が作成した「完成後の街並み模型」を活用し、ルールに従うことでどのような美しい集落になるかを具体的に示すことで、反対する人や参加していない人への理解を広げていきました。

このように、バラバラになった住民の心を再び一つにまとめ、個人の思いと集落全体の美観を両立させることが最大の難関でした。このプロセスの中で「外はみんなのもの、内は自分たちのもの」という共通認識を育てていったことが、現在の統一感あるまち並みにつながっています。

## 4. 子どもたちの活躍

震災遺構である門脇小学校がある石巻市や、隣接する女川町といった被災地では、次世代を担う子どもたちが「自分たちの街」として復興や伝承活動に深く関わっています。

### ①専門スキルを活かした「復興モデル」の作成

石巻工業高校の建築研究部の生徒たちは授業の一環として、被災した住民が将来の街並みをイメージしやすいよう、高台移転先の完成予想図を忠実に再現した建築模型を作成しました。この模型は、住民が新しい生活に希望を持ち、具体的な街づくりを話し合うための重要なツールとなりました。

### ②住民との「意見交換会」への積極的な参画

単に模型を作るだけでなく、生徒たちは住民との意見交換会にも参加しています。海と山が融合した街づくりの提案や、集会所のデザインに自分たちの意見を反映さ

せるなど、プロの設計者や行政、地域住民と対等な立場で議論に加わっています。

### ③教訓を後世に刻む「いのちの石碑プロジェクト」

女川町での事例ですが、当時の中学生たちが自分たちで資金を集めて町内約20箇所に「いのちの石碑」を建立しました。これには「ここより下に家を建てないで」という津波の教訓が刻まれており、震災を風化させず、将来の命を守るための伝承活動を子どもたちが主体となって進めています。



▲「いのちの石碑プロジェクト」に取り組む子どもたち

門脇小学校付近には「宮城東日本大震災津波伝承館」が整備されており、この一帯は震災の教訓を伝える中心的な場所となっています。

このように、この地域の子どもたちは単なる「被災者」や「見学者」としてではなく、技術的な支援や提言、そして教訓の語り手（伝承者）としての役割を担い、街の復興を支える「活動人口」の一翼を担っています。



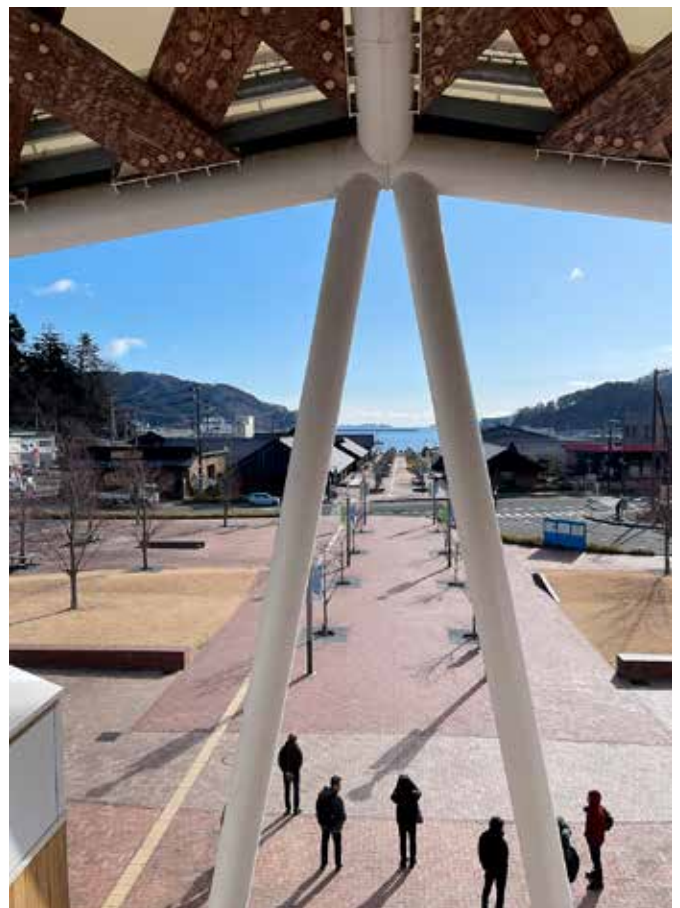
▲津波被害と火災被害後の門脇小学校内部



▲門脇小学校前にて

身近なところでは、道の駅八幡浜みなとで、災害が起きた際に遠方にも支援できる「デジタルボランティア」を育成し、現在、高校生以上の20名が登録して学習を重ねています。

我々建築士に出来ることはたくさんあると思いますが、愛媛県では、建築5団体がそれぞれの「強みを活かした」フェーズフリーの取組みとは何かを模索し、実践していかなければ！と強く思いました。



▲初日の出が見える軸線（女川）

# 建築市民文化講座 2026 in いまばり

文化財・まちづくり委員会 白石 耕平

開催日：令和8年3月14日(土) 10:00~12:00

場 所：旧八木商店と波止浜海岸通り周辺

参加者：20名、建築士会スタッフ7名

3月14日、今治市波止浜にて「建築市民文化講座inいまばり」を開催しました。波止浜は近世から近代の建築物、街並みが残っています。市民の方々に建築士の解説を聞きながら波止浜の歴史を楽しく学んでいただく「まち歩き」イベント。建築士会スタッフ7名、一般参加者20名で始まりました。八木商店本店→波止浜問屋町→沖ノ町→海岸通り→蓬莱町→龍神社の順で回ります。まず登録有形文化財の旧八木商店本店に集合いただき、所有者である藤高興産(株)の藤高豊文氏による旧八木商店本店の歴史、建築年代、所有に至った経緯などをお話ししていただいた後、広大な建物の見学へ。230坪以上にわたる建築物の見学となると20名の参加者が一同に行動するはずもなく、皆さん思い思いに興味のそそる部屋に散らばって見学。別世界に入り込んだような眼差しで食い入るように見入る参加者の方々。建物だけでなく、裏山を取り込み回遊式に造られた庭園も見応え十分だったようでした。参加者の大半が今治の方でしたが、地元これだけの近代和風建築として全国的レベルの様式・技術を駆使して造られた建物を深く知る機会というのは中々ないでしょう。



▲八木商店本店 藤高氏による説明の様子

八木商店本店の後は波止浜で生まれ育った曾我部さんの解説を聞きながらまち歩き。波止浜は全国有数の塩田産地として栄え塩田事業を通じて、海運、船舶関連の事業で商人の行き交う港町として栄え、かつては映画館やパーソして遊郭があったと解説。昔の写真と今の風景を見比べながら往時の栄華を偲ばせる町場の問屋や商家、擬洋風建築などを見学。ノスタルジックな建築の風情を楽しみながらの散策となりました。

まち歩きの最後は塩田の完成と住民の繁栄を願って建立された龍神社と海中鳥居を和田崇さんに説明していただきました。この海中鳥居ですが、参拝者がこの鳥居を



▲曾我部さんによる解説の様子

くぐると、潮水の清めで靈験のご加護受けられたと伝えられています。また、毎月1日、15日は大鯨が龍の使いとして鳥居をくぐって参拝したといわれ、この日に漁をすると網が破れ不漁になったという伝説も。今治在住の自分も初めて知りました。



▲龍神社と海中鳥居▲



▲建造中の船を背景に集合写真

波止浜の後、急遽、弊社が施工している登録有形文化財・明専寺鐘樓門の見学会を行い10名が参加してくれました。今回の建築市民文化講座を通して一般の方々に建築士会の活動を知っていただく良い機会になったのではないかと考えております。

# とびだせ建築士 in 東予 「橋をつくろう」

青年委員会 委員 高木 伸幸

開催日：令和8年2月16日(月) 13:50~15:40  
場 所：東予高等学校  
参加者：東予高校建設工学科 1年生15名

## とびだせ建築士とは

県内の高校生（建築科）の生徒を対象に、我々建築士と直接交流する機会をつくり共に学ぶことで、建築の楽しさを知ってもらうことを目的とした活動です。

東予地域では、東予高校建設工学科の学生・先生に協力をいただき活動しています。今回で8回目となる「橋を作ろう」は前年に引き続き今年も東予高校1年生を対象に開催しました。

この「橋をつくろう」は身近にある材料を使って橋を作り、荷重に見立てた100角タイルをいくつ載せられるかを各班で競争しよう、という至ってシンプルな内容です。

## 「橋をつくろう」2025年度

30cmの間隔をあけた2本のH鋼に指定の材料を用いて橋をつくり、タイルを載せて強度を競う。

- ・材料：マグネット50個、竹ひご180mm×4、割り箸1組、半紙1枚、糸1m×2本、クリップ4個、セロテープ300mm×6本、A3紙1枚(かご)、輪ゴム2本
- ・制限時間：50分
- ・荷重は100角タイルを用いて各班リーダーが1枚ずつ載せていく。



▲ 作成の様子

アドバイスはせず「大まかな橋の形を考えて、荷重がかかるとう壊れそうなところをどう補強していくか考えながら作りましょう」とだけ伝え見守ります。初めはどうか作ればいいのかかわからないようでしたが、誰かの意見が出るとすぐに色々アイデアを出し合い、試行錯誤しながら

ら形にしていきます。今年は作り出すスピードも速く、各班補強の仕方や方法を議論し工夫することに時間を使っている印象でした。ある程度形になるとタイルを1枚だけ載せ、さらに改良を加えます。



▲ 補強改良中

いよいよ各班の橋に荷重を載せ実験です。計測前に①想定枚数と破損予想を発表し、タイルを載せて計測していきます。そして②結果枚数、③どこが壊れたかを記録します。

実験結果	
1. 想定枚数	
2. 結果枚数	
3. どこが壊れたか?	
A班	B班
1. 23枚	1. 7枚
2. 10枚	2. 11枚
3. 左側	3. 左側
C班	D班
1. 16枚	1. 15枚
2. 13枚	2. 8枚
3. 両端のあたり	3. 両端のあたり

▲ 4班の実験結果

最高記録は13枚。想定を上回る班は少なかったですが、載せ方を工夫したり予想以上にたわむことに驚いたり盛り上がりました。

最後に、今回の授業では材料や時間、想定、結果検証など建築と同じ要素が入っていることや、学びとともに楽しむことの大切さを話しました。

来年度からは学校編成により東予総合高校へと変わりますが、建設工学科は残ります。引き続き出前授業を通して建築の魅力や楽しさに触れ合える機会となればと願っています。

# 愛媛県建築士会・愛媛木材 青年協議会合同セミナー

青年委員会 委員 河田 大樹

開催日：令和8年2月7日(土)  
開催場所：久保豊ビル3階二番町ホール（松山市）  
参加者：愛媛木材青年協議会12名  
愛媛県建築士会16名

今年度は私（河田）が愛媛木材青年協議会の会長を務めており、愛媛県建築士会青年委員長の武智さんと打合せを重ね、2月7日に愛媛県建築士会・愛媛木材青年協議会合同セミナーを開催することが出来ました。

ヤナギデザインオフィス代表の柳原直和さん、サイプレス・スナダヤ代表取締役社長の砂田雄太郎さんの2名に講師を務めて頂きました。

柳原さんからは、愛媛木材青年協議会の会員に向けて「2025年4月建築基準法改正」に関するお話を中心に講演を頂きました。木材業者として、法改正後はどのような点に気をつけていく必要があるか、柳原さんが手掛けた実例を交えながらお話をして頂きました。「法改正をチャンスに変える」との言葉もあり、とても勉強になりました。

その後は、場所を移して懇親会を開催しました。講演会とは違って変わって、とても和やかな雰囲気の中で会員同士が交流を深めることが出来ました。講演内容についての質問や意見、日々の仕事での話、プライベートの話、など様々な話題で大いに盛り上がり、懇親会の時間はあっという間に過ぎていきました。



▲砂田さんの講演の様子



▲柳原さんの講演の様子

砂田さんからは、愛媛県建築士会の会員に向けて「製造側からみる今後のCLT」について講演を頂きました。CLT製造工程を自社工場の動画を交えてご説明頂き、その後、CLTの実際の使用例などについてもお話頂きました。「CLTは安いのか?」「CLTを活用するにはどうすれば良いのか」といった踏み込んだ話題もお話し頂き、皆さんにとっても貴重な講演になったのではないのでしょうか。



▲懇親会後の記念撮影

愛媛県建築士会と愛媛木材青年協議会は近い業界にいなながら、交流の少ない関係でした。お互いの業界発展のため、また日々の仕事に活かせるように、今後もより良い関係を築いていければと思います。本事業が1回だけの開催で終わることなく、今後さらに交流の輪が広がっていくことを願っております。

最後に、今回の合同セミナーの開催にあたり多大なご協力を頂きました、愛媛県建築士会青年委員長の武智さん、愛媛建築士会事務局の皆様、改めて御礼申し上げます。

# 青年委員会主催 令和7年度技術講演会 報告

## 防災まちづくりから新しい展開へ

—建築士会・建築士とともに築く新しい未来—

青年委員会 委員長 武智 良太

開催日：令和8年2月21日(土) 15:00～17:00  
 開催場所：愛媛県民文化会館別館 第13会議室  
 参加者：19名  
 講師：川端寛文氏（名古屋工業大学高度防災工学  
 研究センター客員教授）

2月21日、愛媛県民文化会館別館にて愛媛県建築士会青年委員会主催の技術講演会が開催されました。

今年度は、防災まちづくり・木造耐震の普及に尽力されている名古屋工業大学高度防災工学研究センター客員教授の川端寛文先生を講師にお迎えしました。



▲阪神淡路大震災を振り返る

まずは川端先生のこれまでの取り組みを紹介。全国30府県で建築士・大工・行政職員を対象とした安価な耐震改修工法をレクチャーしていく「木造住宅の耐震リフォーム達人塾」を開催、簡易型（愛知県型）シルバーハウジングの確立、あいくる（リサイクル資材評価制度）の設立、防災まちづくりマネジメントシステムの提案等ご紹介いただきました。

防災まちづくりについて、まず肝要なのは「地震時に地域に死者、けが人を無くす」という点を、愛知県半田市岩滑区防災まちづくり等の先生の過去の取り組みに照らし合わせながらご解説いただきました。

特に高齢者等の災害弱者に着目しており、自主防災会と災害弱者のコミュニケーションを図るとともに、その世帯の家具転倒防止の実施、建築士会や地元の大工さんと連携した家具転倒防止講習会の開催（これは愛媛県建築士会松山支部の防災講座の中で行っている内容に近いかもしれません）そして高齢者の安否確認の仕組みや安否調査訓練、災害時要支援者の支援体制の構築等をお話いただきました。



▲防災まちづくりの概念について解説

続けて安価な耐震改修技術の進展についてお話いただきました。特に高知県を中心に安価な耐震改修工法は広がりを見せており、その中でも黒潮町の改修工事実績は多く、理由として、住民の防災意識の高揚と理解。地元大工対象に安価な耐震改修工事勉強会などの実施。ほぼ補助金内で出来る改修工事への安心感他、詳しく解説いただきました。住民の防災意識と耐震化への理解の浸透については愛媛県も追隨したいと感じます。また、私達建築士にとっても住宅耐震を大きな産業にできる可能性を示唆しており、建築士のまわりに広がるあらゆる可能性にも触れる、学び多き講演会となりました。

講演後は、松山市内に場所を移して懇親会。お酒を交えて少し肩の力を抜いて、改めて意見交換を行うことが出来ました。



▲講演後の懇親会

ご登壇いただいた川端先生ならびに参加者の皆様、誠にありがとうございました。

# 令和7年度 全国青年委員長会議 報告

## 青年協議会合同セミナー

青年委員会 委員長 武智 良太

開催日：令和8年3月7・8日(土・日)

開催場所：愛知県豊橋市

参加者：武智良太、遠藤彰騎

3月7～8日に愛知県豊橋市にて、令和7年度全国青年委員長会議が開催されました。

今回の副題は「士会の豊かな職能と可能性を掘り起こし社会との関わり方を拓けよう～アイデアをカタチにした学生コンペ 徹底解剖～」『建築士の職能の豊かさを認識してもらおう』『会への興味喚起と新入会員の増加』に繋がった取り組みについて講演いただきました。

令和4年に愛知県豊橋市で実施された「とよはし公共建築学生チャレンジコンペディション」は、豊橋市内における実際の公共施設整備を題材とした学生コンペディションを開催するとともに、コンペディションで選考された学生がアドバイザーの指導のもと、自らのアイデアを実現する企画・設計段階のプロセスに参加する機会を提供する取り組みで「地域の風土とともに育つ保育園」をテーマとし、全国より114組の提案から選ばれた学生のアイデアが基となった「豊橋市立つつじが丘保育園」の企画から基本・実施設計、施工、開園、そして開園から1年経った今現在に至るまでを、文字通り徹底解剖していきました。



▲つつじが丘保育園外観（内観は写真投稿NGとのこと）

まずは豊橋市建設部住宅課長の加藤宣隆氏と、豊橋市建築課技師（事業当時）の中川直樹氏から本計画の概要についての解説と、事業について改めて振り返っていただきました。計画段階から竣工に至るまで、提案者である学生さん・アドバイザー・設計者・施工者・利用者である保育士さんの各人各様の意見の取りまとめと調整、概要を聞くだけでも苦勞が伺えます。

続いてつつじが丘保育園現地に移動し、施設見学を行いながら提案者（当時学生さん）・設計者・施工者・利用者（保育士さん）の、それぞれの所見と感想をお伺いすることができました。

皆様の話を聞くにつけ、色々と実験的な事業であったと同時に、難しいながらも伸び代のある今後も大きな可能性を秘めている事業であったのではないかと思います。

そして1日目の夜は意見交換会。翌日も同じグループとなる皆さんと、お酒もいただきながら交流を深めて翌日のグループワークに備えます。また、途中AIを使った余興なども。



▲意見交換会

2日目は4県1班ずつに別れてグループワーク。昨日学んだことも踏まえながら、建築士会として各自の職能を活かしてどういった活動・事業ができるかAIも活用しながら考えていきました。



▲「やりたい」「やらなければならない」事業を発表

全国青年委員長会議には、自身3度目の参加となりましたが、考えさせられることの多い2日間でした。この2日間で得たものを今後愛媛で活かしたいと思います。

# 松山支部 6地区対抗ボウリング大会報告

日時：令和8年2月6日(金) 18:00～  
場所：KIT (旧キスケボウル)  
参加者：40名

## 個人の部 優勝 西地区 井上 竜治

このたび、建築士会松山支部ボウリング大会で優勝することができました。本当にありがとうございます。

スコアは161点と158点、トータル319点！年に2回くらいしかしないのに、優勝できたことにいちばん驚いているのは本人です。ボウリングの魅力は、やっぱり、ストライクが出た瞬間の爽快感だと思います。

とにかく、ストライクを目指して、まっすぐ投げることだけを心掛けました。

ただ、ボウリングで一番難しいのは技術よりも……実は「隣とのシンクロ」だと思うんですよ。ボールをセットして、セーので投げようとする、なぜか隣の人とタイミングがピタッと合ってシンクロしてしまう時、あの瞬間が、ちょっと気持ち悪いのは私だけではないと思います。

しかも意識した途端にプレッシャーに弱いのか、ボールも気持ちもブレて、だいたい変なとこに転がっていきます(笑)。隣とのタイミングを見ながら、今回は余計なことは考えず、まっすぐ、直球ストレートで投げ、ストライクを狙いつつ、なるべく慎重にスペアを積み重ねることを意識しました。

参加者の中には、私よりもっと上手い方もたくさんいましたが、ただ今回は本来の調子を発揮しきれなかったことも、私の優勝の大きな要因だったと思います。「運も実力のうち」ということで、今回はしっかり運を使わせていただきました(笑)。

そして何より、一緒にプレーしたチームの皆さんのおかげで楽しい雰囲気の中で投げられたことが、今回の結果につながりました。心より感謝しています。

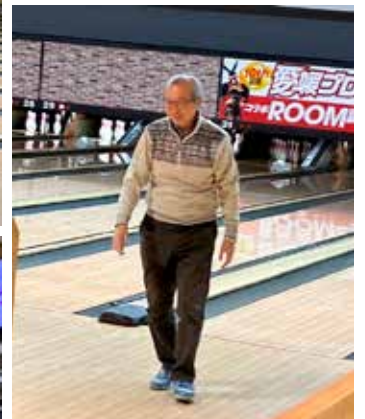
また次回もストライクを一つでも多く取れるように、2連覇目指して頑張りたいと思います。ありがとうございました。



▲ 1ピン残った……



◀ 何ピン倒れたか気になります



▲ 花岡支部長の順位は？

◀ 優勝目指して頑張ります

## 団体の部 優勝

北地区 入船 安紀

毎年恒例のボウリング大会に参加しました。いつからか毎年参加するようになりましたが、練習は全くしておらず、1年に1回、2ゲーム、というスタイルで毎年ボウリングに挑んでいます。ボウリング自体は、まだ得意な方で、学生時の休みの日はカラオケかボウリングという風を楽しんだ時代もありました。

今年も、総勢40人と参加者も多く、8レーンで4～5人の組合せで行いました。私のチーム(3レーン)は、北地区の水口さん、山内さん、成松さん、門屋さん、そして私の5名での参加となりました。それぞれ10分間の練習時間を終えて、いざ本番へ！

私自身は、その日はあまり調子が良くなく、2ゲームで207というスコアになりました。やはり1年に1回しかしていないのもあり体力も無く、1ゲームでかなり疲労し、腕も指も力が入らなくなる始末……。なんとか最後の力を振り絞ってボウリングを終えました。

2ゲーム終え、結果発表はその後の懇親会で伝えられました。そして、3レーン、チーム優勝！！一緒にチームとして参加していただいた、山内さんは個人で2位という成績でしたので、他の皆さん達の成績でチーム優勝することができました。

懇親会も和気あいあいと楽しく盛り上がり、話に花を咲かせ無事に終了いたしました。

ボウリング大会や懇親会のお世話いただいた方や参加していただいたメンバーの方にも本当にお世話になり、おかげ様で楽しい時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。毎年1回ではありますが、この集いを楽しみに、体力が続く限り参加したいと思います。

# 写真集「愛する愛媛の近代名建築 写真 北村徹」

一般社団法人 愛媛県建築士事務所協会

撮影 北村徹(日本建築写真家協会 正会員)  
執筆・編集 北村徹&(一社)愛媛県建築士事務所協会  
教育・情報委員会 近代名建築写真集発行WG

建築士会館3階の(一社)愛媛県建築士事務所協会です。家主の建築士会様とは会員が個人単位か事務所単位かの違いはありますが、建築物の質の向上、建築文化の発展等を目指す建築士活動の支援をする立場に変わりはなく、共通会員も多く長年友好団体としてお付き合いさせていただいており、この場を借りて感謝申し上げます。

今回紹介する写真集「愛する愛媛の近代名建築」は、協会会報誌「JAAFえひめ」(年1回発行)に掲載してきた建築写真家の北村徹氏撮影の近代名建築の写真を1冊にまとめたもので、協会の教育・情報委員会(高橋朋子委員長)内の写真集発行ワーキンググループ(WG)が担当しましたが、メンバー全員が建築士会会員で土会の文化財・まちづくり委員会の過去の書籍発行経験など、多くの助言をいただきました。

WGでは全面的に編集し直す方針のもと、北村氏による写真の追加・差替えに加え、新たな説明文の執筆と平面図掲載をWG委員が分担しました。因みにメンバーと分担は次のとおりです。主査の花岡直樹さん(土会の文化財・まちづくり委員会前委員長/総括)、峰岡秀和さん(同委員長/設計者解説)、和田崇さん(同委員/建築概要)、白石卓央さん(建築解説)、相原昌彦さん、二宮正行さん、そして高橋さん(以上、平面図加工等)です。

また、写真集には建築物ごとに北村氏の建築に対する思いや、撮影秘話を収録したことも注目ポイントです。その中から一部を紹介します。

## <愛媛県民館>

「1953年竣工の愛媛県民館は建築家丹下健三と構造設計家の坪井善勝により設計され、その年の第5回日本建築学会賞に選出された。時間と共に人々の記憶の中から消えてゆくであろうこの美しい建築は、わずか43年間という短い生涯を終えようとしていた。

歴史に残すべき建築が壊され亡くなる運命を辿るのであるなら『残せるのは写真しかない』と強く思った瞬間だった。」

建築士事務所協会では、この北村氏の熱い思いに賛同して近代名建築の会報誌掲載をしてきたわけですが、収録写真は光と影の演出、巧みな撮影技術から建築の魅力を余すことなく引き出しており、写真自体が芸術作品です。ぜひご鑑賞下さい。

## ● CONTENTS

建築名称	設計者
● 今治市公会堂	丹下 健三
● 今治市民会館	丹下 健三
● 愛媛県民館	丹下 健三
● 西条市体育館	坂倉 準三
● 西条栄光教会 礼拝堂・牧師館・幼稚園	浦辺 鎮太郎
● 旧制松山高等学校講堂「章光堂」文部省	文部省 鳥海 他郎(推定)
● 旧久松家別邸「萬翠荘」	木子 七郎
● 愛媛県庁本館	木子 七郎
● 八幡浜市立日土小学校	松村 正恒
● 鬼北町庁舎	レーモン建築設計事務所
● 小西本家「色ガラスの家」	不詳



▲表紙 愛媛県庁本館



▲愛媛県民館(現存せず)



▲今治市公会堂



▲西条市体育館(現存せず)



▲旧制松山高等学校講堂「章光堂」

問い合わせ先 (一社)愛媛県建築士事務所協会

TEL : 089 - 945 - 5200

● 販売価格 3,000円(消費税込み) 送料無料

○申込方法

HP : <https://www.ehimekai.com/>

又はORコードよりお申込みください。



## あなたの原稿をお待ちしています。

公益社団法人として、異業種や全ての皆様から建築士会の枠を超えて原稿を広く募集しています。是非、寄稿して頂きますようお願い致します。本年度は年6回発行となります。  
(尚、営業的色彩の濃いものにつきましては、掲載されない場合もありますので、ご了承ください。)

### 「いしづち」の次号の原稿締切日

令和8年 7月号 (171号) 令和8年5月28日(木)

※1ページ写真込みで2150文字(25文字×43行×横2段)のWORD様式を事務局で用意していますのでご活用ください。

写真は1ページ当たり3枚程度まで題名を付けて添付してください。

また宜しければ投稿者の写真(免許写真程度の顔写真)を添付してください。

会員の皆様のご参加をお待ちしております。また記事等についてのご意見・ご感想もお寄せください。

(尚、投稿された原稿につきましては、要旨を変えない程度の若干の訂正等を加えることがあるかもしれませんので予めご了承ください。)

この誌面を通じて、会員の方々、そして一般の方々にも、建築についての対話等の輪が広がればと願っています。  
情報・広報委員会

## 読者の声欄

「いしづち」に関するご意見・ご提案などをお寄せください。お待ちしております。

「いしづち」編集委員会(士会事務局内) 宛 FAX 089-948-0061

## 編集後記

2月末に名古屋市北区名城公園内の「IGアリーナ(愛知国際アリーナ)」に訪れました。

このアリーナは、隈研吾氏が主宰する隈研吾建築都市設計事務所が外観デザインと内装の一部を手掛けています。

プレスリリースによると、RC造(一部S造)、地上5階建て、延べ面積6万3000㎡。最大収容人数は1万7000人。設計は前田建設工業・隈研吾建築都市設計事務所・大建設計JV。施工は前田建設工業。

隈氏のインタビューの中で、隈氏はデザインのテーマを“樹形アーチに包まれたアリーナ”とし、こんなことを語っています。

「大きなボリュームをどうやってヒューマンな、人間らしい空間にするか、人間にとって親しみがあって優しい空間にするか、そのためにこの樹形アーチを思いつきました。IGアリーナの敷地は、幸いなことに名城公園と隣接していて緑がすぐ自分のもののようにあるので、そこに樹形アーチを取り付けるとIGアリーナが名城公園の杜と一体化する、杜になる、そういう想いを込めてこの樹形アーチを思いつきました。」

私は、このコメントを読んでから訪れたため、名城公園の緑の杜と調和するような建築とはどういうものなのか。アリーナのボリューム感の中、スケールのどのくらい収まるのかを一番気にしていました。ところが実際に見てみるとさすがにバランスよく収まっていて、杜というものが人間の手でも作れるということに驚き実感できました。

隈氏のインタビューは続きます。

「樹形アーチには大きく三種類の違いがあって、ぐるっと一周した時にそれぞれの環境とうまく調和してほしいと思って違いをつけました。観客を迎え入れるエントランスのところでは、来てくれた方々の高揚感を高めたいという思いで、大きくせり出した樹形アーチにして、大樹を抜けていく杜の感覚を演出しています。」

私もエントランスから室内に入ると、アリーナ内部にも名城公園と一体化する仕掛けの「木陰天井」があり、まさに大樹を抜けていく感覚になりました。

アリーナで開催されているイベントにも参加しましたが、空間はものすごくフレキシビリティが高く、僕が想像したこともないような凄いスケール感とスピード感のあるものが見られました。

今後、IGアリーナだったら、私自身が度肝を抜かれるようなイベントが数多く開催されるのではないかと私は思っています。

## 〈いしづち〉2026/5

令和8年5月発行

発行人 会長 尾藤淳一

発行所 公益社団法人 愛媛県建築士会

〒790-0002 松山市二番町四丁目1-5 愛媛県建築士会館2F

TEL(089)945-6100 FAX(089)948-0061 <http://www.ehime-shikai.com>

印刷所 アマノ印刷株式会社

情報・広報委員会・広報委員

委員長/大平 将司 副委員長/渡邊 道彦

編集委員/一之瀬 佳緒理 河合 優志 西岡 亜有美 西森 勉